【研究ノート】

アメリカ合衆国におけるインド系移民の文化変容

京都大学大学院生　　小島　美月

はじめに

現在、我が国の教育現場はさまざまな問題を抱えているが、そのうちの一つとして外国人児童生徒に関わる問題がある。例えば、令和３年の中央教育審議会答申「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」のなかで、日本語指導だけでなく、彼らの「アイデンティティの確立を支え、自己肯定感を育むとともに、家族関係の形成に資するよう、これまで以上に母語、母文化の学びに対する支援に取り組むことも必要である」[1)]と述べられており、彼らの日本社会への調和のためには、居住する日本だけでなく、彼らの母国の文化への配慮が必要であると謳われている。

本稿が対象とするアメリカ合衆国（以下、アメリカ）のインド系移民についても、「インドの伝統を守りながら白人のアメリカ社会といかに調和してゆくかがコミュニティ全体の議論になってきている」[2)]という。インド系移民は、インドが本格的に経済開放政策を推進し始めた 1990 年代以降、その動向が注目され始め[3)]、アメリカでは「1965 年、人種差別的条項を撤廃した移民法が施行され」[4)]、インド系移民の人口が急速に増加し、近年、アメリカにおけるインド系移民の活躍が注目されている[5)]。そこで本稿では、アメリカにおけるインド系移民第二世代の子どもたちについて、彼らのインドの文化及びアメリカの文化に対する考え方や態度という点に着目し、彼らのアメリカ社会との調和について考察することを目的とする。なお本稿では、アメリカにおけるインド系移民とは、アメリカに在住するインド亜大陸からの移民とする。

1. アメリカにおける移民第二世代

本章では、ポルテスとルンバウト[6)]によって提示されている、アメリカにおける移民第二世代の文化変容のプロセスについての理論的視座を述べる。文化変容とは、「移民の家族がホスト社会に適応しようとする際に避けて通ることができない最初のステップ」[7)]であり、彼らが「新しい言語と規範となる生活様式を習得するという意味で、同化への第一歩」[8)]であるとされている。この文化変容のプロセスは、移民の親子間でそのプロセスの進む速さに違いがあるか、プロセスの過程で移民の母語と母文化は維持されるか否かといった点から、以下の３つのモデルに分類されるということである[9)]。

①不協和型文化変容

移民家族の子どもは英語とアメリカの習慣を習得している一方、親はそれらを習得できていないことと、子どもはエスニック・コミュニティのメンバーにならず、親のみがそのメンバーである場合に生じるとされている。さらに、エスニック・コミュニティのメンバーという点については、親子ともにそのメンバーになっていない場合にも生じるとされている。この文化変容の予想される適応結果は、前者の

場合、家族の絆が崩壊するとともに子どもたちはエスニック・コミュニティを放棄し、セミリンガルか英語単一話者になるというものである。この文化変容は、親子の役割逆転につながる可能性がある。今日では、20 世紀初頭のヨーロッパからのアメリカへの移民の第二世代が、役割逆転によって家族から抜け出し、上昇することができた社会的・経済的文脈は存在しておらず、移民第二世代のアメリカ社会への適応を妨げる新たな障害が現れてきているため、役割逆転は、学校からのドロップアウトや麻薬文化に染まることといった下降同化の可能性を示すものとなっている。

②協和型文化変容

移民の親子がどちらもエスニック・コミュニティのメンバーになっていないが、英語とアメリカの習慣を習得している場合に生じるとされている。この文化変容の予想される適応結果は、親子はアメリカの主流社会への統合を探求し、子どもたちは急速に英語単一話者に転換するというものである。この文化変容は、親子がともに同じ文化変容を遂げているため、互いに助け合うことが可能になる。そのため、大多数は上昇同化につながると考えられているが、アメリカの主流社会では差別によってその社会に受け入れられることが妨げられる可能性もあり、必ずしも成功できるとは限らないとされている。

この協和型文化変容は、移民の親子がともにメインストリームであるアメリカの文化を採り入れていこうとするものであるが、彼らがともにエスニック・コミュニティのメンバーとなり、英語やアメリカの習慣を習得しないという抵抗のパターンである、文化変容への協和型抵抗というパターンもみられる。この文化変容の予想される適応結果は、エスニック・コミュニティ内で家族は孤立し、母国へ帰還する可能性が高いとされている。

③選択型文化変容

移民の親子がともに、英語とアメリカの習慣を習得するとともに、エスニック・コミュニティのメンバーにもなっている場合に生じるとされている。この文化変容の予想される適応結果は、協和型文化変容と同様に、親子がともに同じ文化変容を遂げるため、親子間の葛藤が存在せず、子どもたちは流暢なバイリンガルになるというものである。親子がエスニック・コミュニティに属しているために、子どもたちの友人には同国人が多く存在することになる。差別への対抗や新しい文化及び言語の習得には、コミュニティからの援助を受けることができるという。このような、家庭やエスニック・コミュニティからのサポートがあることにより、アメリカと母国の民族的な文化の両方と結びついた上昇同化につながると考えられている。

以上のように、アメリカにおける移民の文化変容のプロセスは３つのモデルに分類されている。これらの文化変容は、移民の親がどのような人的資本をもち込むか、受け入れ国政府の移民政策やその国の人々の受け入れ態勢がどのようなものか、移民のエスニック・コミュニティがどのようなものか、移民の家族構成はどのようなものかといった点によって条件づけられるとされている[10]。

2. アメリカにおけるインド系移民第二世代

本章では、Rupam（2009）の研究[11]をもとに、インドの文化及びアメリカの文化に対する考え方や

態度という点に着目し、アメリカにおけるインド系移民第二世代の子どもたちの特徴についてまとめる。ここで、子どもたちの特徴についてまとめる前に、彼らの親の特徴について触れておく。Rupam は、アメリカにおけるインド系移民第二世代の子どもたちの親の特徴として、次の２点を挙げている。第一に、アメリカの文化は子どもたちにとってネガティブな影響を与えると考えており、子どもたちがアメリカ化することを好まず、子どもたちはインドの文化的価値観や伝統を保持するべきであると考えていた。第二に、子どもたちが熱心に勉強し、成績優秀であり、高い収入の職を得ることを期待していた。つまり、インド系移民第二世代の子どもたちの親は、子どもたちは、インドの文化を保持しながら、熱心に勉強することで、アメリカでの経済的な成功を手に入れるべきであると考えているという特徴がある。

一方、Rupam による調査 [12]により明らかにされていることから、アメリカにおけるインド系移民第二世代の子どもたちの特徴としては、（1）インドの文化を保持することを拒否し、アメリカ化しようとしている、（2）インドの文化を保持し、アメリカ化しようとしていない、またはすることができない、（3）インドの文化を保持しつつ、アメリカの文化にもかかわりをもっているという３つに分類することができると考えられる。それぞれの特徴について、以下に述べる。

（1）インドの文化を保持することを拒否し、アメリカ化しようとしている

先述したように、インド系移民第二世代の親は、子どもたちはインドの文化的価値観や伝統を保持するべきであると考えている。このような親の考え方に対して、不平を感じている子どもたちがみられる。Rupam によって具体的に明らかにされている子どもたちの主張には、「私の親はインド人の女の子と結婚してほしいと思っているが、私は自分の好きな人と結婚するつもりだ、その人はインド人である必要はない。」[13]、「私の親は、私の結婚をインドでさせようとしている…私の彼氏はフランス人。私は彼と結婚するつもり…私の親は彼を受け入れなければならない。」[14]、「インドのパーティに出席するのが好きではない…インドのスパイスの香りが嫌い…私は、親が私に寺院に行かせるのがなぜなのかわからない…」[15]、「私の両親はインド出身だ…私はアメリカ生まれだ。私はかっこいい人々と友達になりたい…私は他のインド人の生徒のように、いけてないやつでいる必要はない。」[16]といったものがある。

このような子どもたちは、自分自身が「インド人であること（Indianness）」を否定し、アメリカに帰属意識をもち、「アメリカ人になること（becoming American）」によって、アメリカの文化に完全に同化できるという前提をもっている。しかし、実際には彼らは本物のアメリカ人としては扱われておらず、教師や同級生からアメリカ人ではなくインド人であると認識され、外国人として扱われ続けていた。文化の違いや同級生への妬み、教室でのネガティブな経験といったことが原因となり、反抗的な態度をとる兆候を示していた。

（2）インドの文化を保持し、アメリカ化しようとしていない、またはすることができない

先に述べたような、インドの文化を保持するべきであるという親の考え方を受け入れている子どもたちがみられる。このような子どもたちは、自分自身の民族的な起源に誇りをもち、家庭の文化に強い帰属意識をもっている、親の民族的なアイデンティティに強く影響され、インドの文化や価値観はアメリカの文化よりも優れているという親の考え方を感じ取っている、親の宗教的、民族的行為を中心に生活

が動き、親の社会的ネットワークに頼っているといった特徴がある。「私たちは、白人でも黒人でもない…私たちは白人とも黒人ともかなり異なっている。私たちは色黒だが、黒人に一致してはいない…私たちの文化は、非常に異なっている…彼らは私たちを理解してくれない。私たちは、一緒になろうとしている。私の友達のほとんどはインド人である。私たちは同じ文化をもち、お互いを理解している。私たちは、インドの映画や歌を楽しみ、お互いを好いている。私たちは互いに助け合っている…」[17]という主張が Rupam によって明らかにされている。

先にも述べたような、インド系移民第二世代の親の考え方である、アメリカの文化は子どもたちにとってネガティブな影響を与えるという考え方に影響され、学校の社会的環境に対する不信感や恐怖を感じることにつながっている子どもたちもみられる。Rupam によって明らかにされている子どもの主張には、親がアメリカ人と交流することを許してくれず、親によって決められた結婚をするという「良いインド人の女の子（good Indian girl）」として振る舞うことが期待されていることで、社会的・文化的な孤独感や疎外感に苦しんでいるというものがあった。

このような子どもたちは、インド人以外の人々とは関係をもたず、閉鎖的な集団に属することになり、学校での社会的な疎外を経験し、教師や同級生との交流が制限され、学習を中断することにつながるとされている。また、自分自身の民族的なアイデンティティを貫くために、内向性が強くなるという。

（3）インドの文化を保持しつつ、アメリカの文化にもかかわりをもっている

先述したような、インドの文化を保持するべきであるという親の考え方を受け入れながらも、アメリカの文化にもかかわりをもっているような子どもたちがみられる。このような子どもたちの特徴としては、自分自身を「アメリカ人（American）」でもあり「インド人（Indian）」でもあるとみなしている、インドの民族的な文化とアメリカのメインストリームの文化のバランスを保っているといったものがある。Rupam は、「私はいつも、家ではインド人であろうとして、学校ではアメリカ人であろうとしている。」[18]、「私はインド人です。私は家族とパンジャーブ語（インドの言語の一つ）を話している。私は、私たちの祭日を祝うことが好きであるし、インドの食べ物が大好きである…しかし、私はアメリカ人でもある。私はアメリカにいる。私は学校では英語を話している…」[19]、「私はアメリカで生まれたので、アメリカ人だ。私の両親はインド出身なので、私はインド人でもある。私はインド人であることに喜びを感じている。私は、インドのダンス、服、インドの食べ物が好きであるし、アメリカの食べ物も好きである…食べることが大好きだ…」[20]といった子どもたちの主張を明らかにしている。

このような子どもたちは、家庭で親とよくコミュニケーションをとり、教育が重要であるという親の考えを理解し、熱心に勉強をしていたという。

3. 考察

以上のように、アメリカにおける移民第二世代の子どもたちは、インドの文化及びアメリカの文化に対する考え方の違いによって、３つに分類することができるといえる。これら３つの分類をポルテスとルンバウトの理論をもとに、次のように分析できると考えられる。以下の表１は、インド系移民第二世代の子どもたちの特徴と、その特徴がどの文化変容につながるかについてまとめたものである。

（1）インドの文化を保持することを拒否し、アメリカ化しようとしているという特徴については、

表１　インド系移民第二世代の文化変容の型

インド系移民第二世代の子どもたちの特徴	子どもがアメリカの文化を採り入れている	親がアメリカの文化を採り入れている	子どもがインドの文化を保持している	親がインドの文化を保持している	文化変容の型
（1）	○	×	×	○	不協和型文化変容
	－	－	－	－	協和型文化変容
（2）	×	×	○	○	文化変容への協和型抵抗
（3）	○	×	○	○	特徴的な選択型文化変容

出典：ポルテスとルンバウト（2014）[21]を参考に筆者作成

アメリカの文化を採り入れず、インドの文化を保持している親に対し、子どもたちは、インドの文化を保持することを拒否し、アメリカ化しようとしているという点で、不協和型文化変容にあてはまると考えられる。（2）インドの文化を保持し、アメリカ化しようとしていない、またはすることができないという特徴をもつ子どもたちは、インドの文化を保持し、アメリカ化しようとしていることから、親子ともにアメリカの文化を採り入れず、インドの文化を保持しているということで、文化変容への協和型抵抗にあてはまるといえる。（3）インドの文化を保持しつつ、アメリカの文化にもかかわりをもっているという特徴については、子どもたちはインドとアメリカの両方の文化をもっているという点で、選択型文化変容にあてはまるように考えられる。ポルテスとルンバウトの理論による選択型文化変容は、親子がともに両方の文化をもっている場合であるとされているが、インド系移民の場合は、親がアメリカの文化を採り入れていない場合であっても、子どもたちは両方の文化をもっている場合がみられる。この点は、インド系移民第二世代の子どもたちの文化変容において、特徴的であると考えられる。

第１節で述べた、ポルテスとルンバウトの文化変容の理論から導き出されている、不協和型文化変容、協和型文化変容、文化変容への協和型抵抗、選択型文化変容という文化変容の４つのパターンについては、アメリカ社会との調和という観点から、不協和型文化変容と文化変容への協和型抵抗は、アメリカ社会との調和が困難なものであると考えられ、協和型文化変容と選択型文化変容は、アメリカ社会と調和することができると考えられる。そのため、（1）インドの文化を保持することを拒否し、アメリカ化しようとしている子どもたち及び（2）インドの文化を保持し、アメリカ化しようとしていない、またはすることができない子どもたちは、アメリカ社会との調和が困難であり、（3）インドの文化を保持しつつ、アメリカの文化にもかかわりをもっている子どもたちは、アメリカ社会と調和することができるといえる。

以上より、アメリカにおけるインド系移民第二世代の子どもたちは、インドの文化とアメリカの文化の両方を保持することによって、アメリカ社会との調和が可能となっていることがわかる。一方、インドとアメリカのどちらかの文化をもつことしかできず、アメリカ社会と調和することが困難であるインド系移民第二世代の子どもたちもみられることが明らかとなった。

おわりに

本稿では、アメリカにおけるインド系移民第二世代の子どもたちについて、彼らのインドの文化及び

アメリカの文化に対する考え方や態度という点に着目し、彼らのアメリカ社会との調和について考察することを目的とした。本稿で明らかになった点は次の２点である。第一に、アメリカにおけるインド系移民第二世代の子どもたちの特徴を、インド及びアメリカの文化に対する考え方や態度という観点から３つに分類することができ、ポルテスとルンバウトの理論にもとづいて分析すると、選択型文化変容に特徴的な点がみられることである。第二に、アメリカ社会との調和という観点では、インドとアメリカのどちらか一方の文化のみをもっている子どもたちは、調和することが困難であると考えられ、インドとアメリカの両方の文化をもっている子どもたちは、調和することが可能であるといえることである。このように、本稿では、アメリカにおけるインド系移民第二世代の子どもたちの文化変容の型についての特徴とその文化変容によるアメリカ社会との調和がどのようなものになるかを明らかにしたが、文化変容を条件づける要因について分析することができていない。文化変容は、移民の親の人的資本、受け入れ国やエスニック・コミュニティの状況、移民の家族構成といった点によって条件づけられるとされており、インド系移民第二世代の子どもたちがそれぞれの文化変容を遂げる条件について明らかにすることを今後の課題としたい。

1) 中央教育審議会「『令和の日本型教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）」2021 年。
2) 関口真理「アメリカのインド人」古賀正則、内藤正雄ほか編『移民から市民へ－世界のインド系コミュニティー』東京大学出版会、2000 年、200 頁。
3) 広瀬崇子「海外で活躍するインド人のネットワーク」広瀬崇子、近藤正規ほか編『現代インドを知るための 60 章』明石書店、2007 年、325 頁。
4) 関口真理、2000 年、前掲書、197 頁。
5) 関口真理、2000 年、前掲書、199 頁。
6) アレハンドロ・ポルテス、ルベン・ルンバウト著、村井忠政訳『現代アメリカ移民第二世代の研究 移民排斥と同化主義に代わる「第三の道」』明石書店、2014 年。
7) アレハンドロ・ポルテス、ルベン・ルンバウト、2014 年、前掲書、503 頁。
8) アレハンドロ・ポルテス、ルベン・ルンバウト、2014 年、前掲書、110 頁。
9) アレハンドロ・ポルテス、ルベン・ルンバウト、2014 年、前掲書、111-113 頁。
10) アレハンドロ・ポルテス、ルベン・ルンバウト、2014 年、前掲書、100-108 頁。
11) Rupam Saran, “In Between Indianness and Americanness: Second-Generation Asian Indian Youths in New York.” *Anthropologist Special*, No.4, 2009, pp.51-64.
12) 調査は 2004 年から 2006 年に実施されている。インタビューの対象者は中学校（middle schools）、高校（high schools）、大学（colleges）に在籍する者であるが、インタビュー内容ごとの属性は論文中では明らかにされていない。
13) *Ibid.*, p.54.
14) *Ibid.*, p.54.
15) *Ibid.*, p.58.
16) *Ibid.*, p.58.
17) *Ibid.*, p.61.
18) *Ibid.*, p.61.
19) *Ibid.*, p.62.
20) *Ibid.*, p.62.
21) アレハンドロ・ポルテス、ルベン・ルンバウト、2014 年、前掲書、111 頁。

Acculturation of Asian Indian Immigrants in America

Mizuki KOJIMA

This paper aims to clarify the acculturation of second-generation Asian Indian children in America by focusing on the way of thinking and the attitude toward the culture of India and America respectively. The number of immigrants from India to America has been increasing since the 1990s. Asian Indian immigrants in America need to adapt to the American society by preserving their own culture and tradition of India. The process of the acculturation of immigrants in America can be divided into three types. The way of adapting to the American society is various. Furthermore, three types of characteristics can be found in the case of second-generation Asian Indian children in America. Children of the first type reject their Indian culture and try to become an American. Children of the second type try to maintain their Indian culture but do not try to become an American. Children of the third type try to keep their Indian culture and relate to the American culture at the same time. Children of the first type could not adapt themselves to the American society because of the discrimination and prejudice from Americans. Also, children of the second type were not able to adapt themselves to the American society as well. However, some of them were able to maintain their Indian culture well, while others did not like their Indian culture. Lastly, children of the third type were able to adapt themselves to the American society and kept their own Indian culture at the same time. Clarifying the factors which affect the way of thinking and the attitude toward the culture of India and America of the second-generation Asian Indian children in America will be a future task.